

The Well-Beloved における土地と人と時をめぐって

大 桃 道 幸

(2008年9月30日受付, 2008年12月8日受理)

要旨: Thomas Hardy の最後に出版された小説 *The Well-Beloved* は、England の辺境 The Isle of Slingers を舞台に、彫刻家 Jocelyn Pierston が島の娘 Avice Caro, その娘、孫娘と三代に渡って同名の女性を愛するという、Hardy の後期の小説としてはかなり異質の作品である。物語の非現実性と外界から隔絶したような島の特異性から、この作品は一種のファンタジーとして、捉えることのできない理想の女性を追い求める男性の物語、プラトニックなアイデアの追求をテーマとする作品として読まれることが多い。しかし、一見ファンタジーのような体裁を取りながら、*The Well-Beloved* には Hardy の後期の小説に通底する社会史的な側面があり、それは時代の潮流と伝統的な島、つまり新旧の対立という問題である。鉄道と教育に象徴される近代化によって、古来ほとんど変化のなかった島も変化を余儀なくされる。Avice Caro の死は古き島の消滅を表すメタファーであり、主人公 Pierston が Avice 二世, Avice 三世に寄せる想いは、亡き Avice Caro そして彼女の精髓であるかつての島に寄せる想いなのである。

キーワード: 島, 都会, 鉄道, 教育, 変化

1. 序

1897年3月16日に Osgood, McIlvaine 社から一巻本として出版された *The Well-Beloved* は、Thomas Hardy の小説としては最後に出版された作品である。しかし、この作品はもともと *The Pursuit of the Well-Beloved* という題名で、1892年10月1日から12月17日まで12週にわたって *the Illustrated London News* に掲載されたもので、*Tess of the d'Urbervilles* (1891) と *Jude the Obscure* (1896) という Hardy 後期の二大小説の間に書かれたものであると言って良い。

The Well-Beloved は理想の女性像を追い求める彫刻家 Jocelyn Pierston の恋の遍歴を描いた作品で、21歳の時に故郷の幼馴染みの娘 Avice Caro を愛し、その後約20年おきに Avice Caro の娘、そして孫娘と三代にわたって Avice という同名の女性を愛するが、結局は理想の女性を手に入れることが出来ないという筋立てである。

Hardyは1912年にMacmillan社がthe Wessex Editionとして彼の作品全集を刊行する際に、*The Well-Beloved* を ‘Romances and Fantasies’ という分類の

中に含めているが、¹⁾ とらえることが出来ない理想の女性を追い求めて彷徨する男の物語はまさに ‘fantasy’ と呼ぶにふさわしいものである。タイトルになっている ‘the Well-Beloved’ とは、女性から女性へと乗り移り、一人の女性の中に長くはとどまらない霊的な存在、Pierston の心の中に恋の炎を燃え立たせる超自然的な存在である。本作品の基調となっているのは、‘the theory of the transmigration of the ideal beloved one, who only exists in the lover, from material woman to material woman’²⁾ であり、主人公の Jocelyn Pierston が愛するのは彼自身の心の中に存在する女性のイメージ、或いはヴィジョンであって、現実的な生きた女性ではない。

Pierstonはthe Well-Beloved に引き寄せられて、それが乗り移ったと思われる女性を次々に追い求めるが、the Well-Beloved は一人の女性の中にずっととどまることがないので、彼はその後を追うように女性から女性へと彷徨するのである。しかし、彼が婚約までして別れた Avice Caro (Avice 一世) の娘と孫娘、つまり Avice 二世と Avice 三世に出会った時、The Well-Beloved は移動せずに彼女達の中にとどまり、

彼を狼狽させる。なぜ the Well-Beloved は Avice 二世と Avice三世の中にじっととどまっていたのか。Pierston にとって Avice Caro とはどのような存在だったのか。本稿では、作品の舞台となっている The Isle of Slingers と時代の変化に注目し、Jocelyn Pierston と Avice Caro の関係を吟味することにより、従来の研究とは少し異なる視点から *The Well-Beloved* を考察してみたい。まず最初に The Isle of Slingers から検討してゆくことにする。

2. The Isle of Slingers—the ancient Vindilia Island, and the Home of the Slingers

Hardy の小説では、農村であれ都会であれ、物語の舞台となる土地・地域が大きな役割を演じ、登場人物たちの人生に少なからぬ影響を与えている。その典型的な例は *The Return of the Native* (1878) の物語の舞台である Egdon Heath である。*The Well-Beloved* でも作品の舞台がとりわけ大きな意味を持ち、登場人物たちの人生に大きな影響を与えている。*The Well-Beloved* の物語の主たる舞台は、農村でも都会でもない The Isle of Slingers (実名は Portland) という Wessex 地方の辺境の地で、そこは実際には島ではなく、本土とは海の波に洗われるほどの、幅が狭く細長い陸地で結ばれた半島である。ほとんどが農村地帯とそこに点在する村や町からなる Hardy の Wessex にあって、The Isle of Slingers は極めて異色の場所で、古代ローマ時代には Vindilia と呼ばれ、人々は石を投げて島を守ったという。‘slinger’ とは「石を投げる人」という意味である。Hardy は作品の Preface において、この地について次のように述べている。

The peninsula carved by Time out of a single stone, whereon most of the following scenes are laid, has been for centuries immemorial the home of a curious and well-nigh distinct people, cherishing strange beliefs and singular customs, now for the most part obsolescent. (25)

ここで言う ‘a single stone’ とは ‘a solid and single block of limestone four miles long’ (28) で、島全体が一枚の石灰岩から出来ていることを意味している。(このような地質的な特徴ゆえに、島の人々は太古の昔から石灰岩を切り出して生計を立てている。) 島では本土では見られぬ植物が生育し、この作品の時代には、人々の間にまだ島特有の風俗や習慣が残っており、異教の神々もある程度その勢力を保っていた。

Pierston の友人でこの地を訪れた Somers は ‘What a romantic place! —and this island altogether. A man might love a scarecrow or turnip-lantern here.’ (118) と慨嘆するが、The Isle of Slingers は理想の女性像を追い求める男の物語にまさに相応しい舞台であると言える。ここでは、本土からやって来る人間はよそ者、つまり ‘kinberlin’ と呼ばれ、島の住人はほとんど彼等とは交わらない。The Isle of Slingers は England 本土とは隔絶した別世界で、全てが昔のまま、時代の流れから取り残されているようである。

しかし注意すべきことは、Hardy が Preface において、島の風変わりな風俗習慣も ‘now for the most part obsolescent’ と記していることである。つまり、Hardy は The Isle of Slingers が辺境の地であり、太古の昔から変化していないことを強調している一方で、‘obsolescent’ という言葉で、今では (Hardy が Preface を書いた時点では) 島の風俗習慣が変わりつつあることを示唆しているからである。(ちなみに、Preface は1912年8月に記されており、*The Well-Beloved* の物語の時代的背景は1850年頃から1890年頃と推定される。)

第1部第1章の冒頭で読者の前にその姿を現す主人公の Pierston は21歳の青年で、仕事場のある London から3年8ヶ月ぶりに帰郷する。そして彼の目に映る故郷の島は、以前と全く変わっていないように、それどころか以前にも増して昔のままのように思える。

‘More than ever the spot seemed what it was once to have been, the ancient Vindilia Island, and the Home of the Slingers.’ (28)

さらに、家に帰った Pierston が周囲を見回す場面は次のように描かれている。

Jocelyn looked round the familiar premises, glanced across the Common at the great yards within which eternal saws were going to and fro upon eternal block of stone—the very same saws and the very same blocks that he had seen there when last in the island, so it seemed to him—and then passed through the dwelling into the back garden. (30)

ここでは ‘eternal’ と ‘same’ という言葉が繰り返し用いられ、島の変わらぬ様子が強調されている。しかしこの引用文では、最後の ‘so it seems to him’

という言葉によって、現実はずしもそうではないことが暗示されていることに注意すべきである。‘seem’ という動詞は Hardy がよく用いる動詞であるが、Hardy はこの ‘seem’ によって〈見かけ〉と〈実体〉が実際には異なっていることを表している場合が多いからである。Pierston の眼に昔と全く変わらぬように映った故郷の島も、変わっていないのはその外見、風景であって、その内部、つまりそこで暮らす人々の生活や風俗習慣には既に変化が起こっていたのである。そして、その変化は鉄道によってもたらされたと言っている。

作品の冒頭、21歳の Pierston が最初に読者の前に登場する場面の時代的背景は1850年頃と推定され、それよりも少し以前に London から島のすぐ近くまで鉄道が敷設されたことが作品の中 (p.50) に記されている。かつては England の僻地であり、外部との接触がほとんど無かった島の近くにまで鉄道が敷設されているという事実は非常に重要な意味を持つ。*Tess* の場合に端的に見られるように、鉄道は従来ほとんど行き来が無かった地域との交流を容易にし、時代の新しい潮流、つまり London などの大都市を中心とする都会文化や産業資本主義の影響を地方にもたらすからである。そしてその結果として、しばしば地方の古い伝統的な文化は衰退し、崩壊してゆくのである。従って、*The Well-Beloved* の舞台である The Isle of Slingers の近くにまで鉄道が延びているという事実は、大きな時代の流れ、変化のうねりが、古代ローマ人が Vindilia と呼んだこの辺境の地まで及んでいる事を示唆するものである。

3. Jocelyn Pierston と Avice Caro の再会

The Well-Beloved の物語は Jocelyn Pierston と幼馴染みの島の娘 Avice Caro との再会の場面で始まる。London から帰った Pierston は、その足で Avice Caro の家を訪れる。Jocelyn の来訪を知った Avice は喜んで彼のもとに駆け寄り、彼にキスをする。これは Avice の無邪気な愛情表現であったが、Jocelyn は驚いて一瞬たじろぐ。

‘Why, ’tis dear Jocel!’ she burst out joyfully. And running up to the young man she kissed him.

The demonstration was sweet enough from the owner of such an affectionate pair of bright eyes and brown tresses of hair. But it was so sudden, so unexpected by a man fresh from towns, that he winced for a moment quite

involuntarily; and there was some constraint in the manner in which he returned her kiss, and said, ‘My pretty little Avice, how do you do after so long.’ (29)

Pierstonの予期せぬ反応によって、その場に気まずい雰囲気が生じてしまい、Avice は自分の行動を後悔する。次の引用は Pierston が帰った後の Avice の母親と Avice との会話である。

‘I was quite amazed at ’ee, my dear child!’ exclaimed the elder. ‘A young man from London and foreign cities, used now to the strictest company manners, and ladies who almost think it vulgar to smile broad! How could ye do it, Avice?’ ‘I—I didn’t think about how I was altered!’ said the conscience-stricken girl. ‘I used to kiss him, and he used to kiss me before he went away.’

‘But that was years ago, my dear!’

‘O yes, for the moment I forgot! He seemed just the same to me as he used to be.’ (30)

Aviceの母親は、今は少女ではなく年頃の女性に成長した Avice の軽率な行動をたしなめ、Avice 自身も自分の思慮の無さを後悔しているのであるが、上の二つの引用文の中で、注意すべき点は Jocelyn についての記述である。Jocelyn は ‘a man fresh from towns’ (29)とか ‘A young man from London and foreign cities, used to the strictest company manners, ….’ (30)と描写されているように、もともと島の出身であるにもかかわらず、外来者すなわち都会から来た青年のように描かれている。彼は London などの都会生活にどっぷりつかっているために、今では故郷の習慣よりも都会的な行動様式や価値観に染まっているのだ。そのため彼は純朴な Avice の率直な愛情表現に違和感を感じたのである。

先に、鉄道が島に変化をもたらしことを指摘したが、Hardyの小説では鉄道に加えて、外来者が土地に変化をもたらし場合も多い。しかも、しばしばその人物は厳密な意味での外来者ではなくて、都会暮らしの後で帰郷する土地の人間なのである。その典型的な例は *The Return of the Native* (1878) の主人公 Clym Yeobright で、彼はParisから帰郷することによって、郷里の人々の生活に大きな影響を及ぼすことになる。Jocelyn Pierston も同様に London から帰ってきた青

年で, Jocelyn と Avice の再会は, 都会で洗練されて帰ってきた島の青年と, 純朴な島の娘との再会であると要約できよう。そして, 異なった土地で生活をしてきたために生じた, 二人の間の意識の差異が, 再会した二人の間に思わぬ心のわだかまりを生じさせたのである。Hardy の多くの小説では〈都会〉対〈田舎(農村)〉というテーマが一つの主題となっているが, *The Well-Beloved* においても Jocelyn と Avice の再会のエピソードの中に, 同様のテーマが織り込まれていると言って良い。

4. Avice Caroと教育

先に取り上げた Avice と Jocelyn との再会の場面では, すっかり大人になった Avice の少女時代と変わらぬ純朴さと, 都会的な価値観を身につけ, 以前とはすっかり変わってしまった Pierston が対照的に描かれていた。しかし, 故郷をずっと離れずに暮らしていた Avice にもまた変化は訪れていたのである。それは鉄道の普及と共にもたらされた新しい教育によるものであった。

鉄道については既に言及したが, それは従来困難であった遠隔地との間での人の往来や物資の輸送を容易にただけでなく, 都会的な新しい教育を地方にももたらしたのである。そして, かつては England の地の果てであった The Isle of Slingers にも新しい教育が導入されていたのである。

再会後しばらくその姿を見せなかった Avice を何とかだめて, Pierston は彼女と共に島を逍遙した。ぶらぶらと灯台までやって来た時, Avice は Wells 通りでその夜詩を朗読する約束があったことを突然思い出す。そして, 彼女が詩を朗読することを知った Pierston は非常に驚いて, 思わず次のような言葉を発する。

‘Recite!’ said he. ‘Who’d have thought anybody or anything could recite down here except the reciter we hear away there—the never speechless sea.’ (33)

そしてこの言葉に対し Avice は ‘O but we are quite intellectual now. In the winter particularly.’ (33) と, 自分たちが今ではかなりインテリであると言う。

その後 Pierston は Avice が知的な集会で詩を朗読出来るだけでなく, ピアノも上手に弾き, 自分で伴奏しながら歌も歌えることを知る。そして彼は彼女を育てた人々のあらゆる目的が, 土地の習俗や言葉や民謡

といったものを含めた島独自の文化や生活様式から, 彼女を出来るだけ遠ざけるものであったことに気付く。

He observed that every aim of those who had brought her up had been to get her away mentally as far as possible from her natural and individual life as an inhabitant of a peculiar island; to make her an exact copy of tens of thousands of other people, in whose circumstances there was nothing special, distinctive, or picturesque; to teach her forget all the experiences of her ancestors; to drown the local ballads by songs purchased at the Budmouth fashionable music-sellers, and the local vocabulary by a governess-tongue of no country at all. She lived in a house that would have been the fortune of an artist, and learnt to draw London suburban villas from printed copies. (36)

Hardy はこの文中で Avice が受けた教育の目標をかなり詳細に, 具体的に示している。Hardy の小説において, 教育は鉄道と共に地方に変化をもたらし, 伝統や個性豊かな文化を一掃するものの象徴であるが, Avice も都会からもたらされた新しい教育の影響を受けていたのである。また, 教育に関しては, *The Well-Beloved* の前作 *Tess of the d'Urbervilles* においても, 主人公の Tess が Avice と同様に教育という革新の波を浴びていたことを思い起こすべきであろう。例えば次の引用文が示すように, Tess の母親がいつも方言を話していたのに対して, London で訓練された女性教師のもとで教育を受けた Tess は, 方言と標準語を使い分けていたのである。

Mrs Durbeyfield habitually spoke the dialect; her daughter, who had passed the Sixth Standard in the National School under a London-trained mistress, spoke two languages; the dialect at home, more or less; ordinary English abroad and to persons of quality.³⁾

Tess と Avice の二人に共通する点は, 二人が共に大きな社会的変動のまっただ中にいるということ, つまり, 彼女たちは生まれ育った土地の伝統的な文化に浸っている反面, 他方において新しい都会的な文化の洗礼を受けているということである。Hardy は Avice

について ‘By constitution she was local to the bone, but she could not escape the tendency of the age.’ (36)と述べているが、このことはまた Tess にも当てはまるものと言えよう。彼女たちは新旧二つの異なった文化、価値観の狭間に生きていたのである。

5. Pierston と Avice —価値観の相克

再会の時に生じた二人の間のわだかまりも解けて、やがて Avice は Jocelyn と結婚の約束をするが、休暇が終わり近づいた Jocelyn は Avice を残して London に帰ることになる。出発の晩、二人が会うことになっていた約束の時間になっても Avice は現れず、彼女を待っていた Pierston のもとに一人の少年が彼女の手紙を届けに来た。彼女の手紙は、その晩 Pierston に会いに来ないことを伝えるもので、その理由は Pierston が結婚にまつわる古くからの島のしきたりに従うことを主張するのではないかと、彼女が危惧したためであった。

The Isle of Slingers には伝統的な結婚の風習があった。それは男女が婚約した場合、男性の側に相手の女性との婚前交渉権があって、彼女に子供が生まれるかどうかを結婚前に確認して、妊娠しなかった場合には婚約が解消できるというものであった。このような風習は、外の社会と隔絶しているために血族結婚が避けられない土地において、子孫を残してゆくために生まれた一種の知恵だったのだろう。Avice は、このような風習は既に廃れつつあり、いずれにせよ良いものではないと考える一方で、万一 Pierston がこの風習に従うことを主張した場合、その結果について不安を抱いていたのである。

先に論じたように、Avice は新旧二つの文化、価値観の狭間に生きており、彼女の心は島の伝統的な風習に対する強い意識と、教育によって啓蒙されて得た現代的な結婚観との間で動揺していたのである。もしも彼女が島の古い伝統を当然のこととして受け容れていたか、或いは現代的な価値観だけに縛られていたならば、約束通りに Pierston に会いに行っていたであろう。Avice が来ないことを知って落胆した Pierston は ‘How the old ideas survived under the new education!’ (41)と慨嘆する。ちなみに、現代的で革新的な価値観が身につけている Pierston には、出発前に Avice に会うことに何の心の迷いもなかった。彼にとって、故郷の結婚にまつわる風習も ‘a bygone barbarism’ (40)でしかなく、その様な風習にこだわる Avice の考えは ‘antiquated simplicity’ (40)に思えたのである。結婚にまつわる島の伝統的な風習に対する

Avice と Pierston との間の認識の相違は、辺境の地と都会という異なった土地で、それぞれが受けた近代化のレベルの程度によって生じたものであったと言えるだろう。

Avice が約束どおりに Pierston に会いに来ていたならば、二人は結婚して、その後の Pierston の物語はなかったであろう。Avice に会えず落胆した Pierston は引き返して乗り物を雇う気もおきず、そのまま徒歩で駅に向かった。そしてその道すがら偶然出会った Marcia Bencomb と London まで一緒に行くことになる。その途中で Pierston は Marcia の中に the Well-Beloved が移ったことを感じ、やがて彼女と婚約する。しかし彼女の父親と Pierston の父親が島では商売敵であったことから、結局二人は結婚することなく別れてしまう。やがて Pierston は Avice が従兄と結婚したことを知る。Pierston はその後 London で彫刻家として活躍し、結婚することなく、the Well-Beloved に導かれて恋の遍歴を重ねる。

6. Avice Caro (Avice一世) の死

Avice Caro を残して故郷の島を去ってから20年後、Pierston は彼女が亡くなったことを手紙で知る。島に帰った Pierston は、亡き Avice Caro の娘で、母親の生き写しのような Ann (Avice 二世) に the Well-Beloved を認めて、彼女を熱愛する。the Well-Beloved は一人の女性の中にとどまることなく、次々に女性に乗り移っては Pierston の恋心を燃え立たせる霊的存在であった筈だが、不思議なことに、Avice 二世に乗り移った the Well-Beloved は彼女の中にとどまって、そこから動こうとはしない。驚き当惑した Pierston は友人の Somers に次のように言う。

I am under a doom, Somers. Yes, I am under a doom. To have been always following a phantom whom I saw in woman after woman while she was at a distance, but vanishing away on close approach, was bad enough; but now the terrible thing is that the phantom does not vanish, but stays to tantalize me even when I am near enough to see what it is! (118)

追ひ求めても捉えられない筈の the Well-Beloved が今 Avice 二世の中に居座り、Pierston が近づいてもじっとしているのは何故だろうか。それは、今 the Well-Beloved が乗り移っている Avice 二世は、the Well-Beloved の見せかけの居場所に過ぎず、実際に

は Pierston の手が絶対に届かない、亡き Avice 一世の中にいるからである。つまり Pierston は Avice 二世の中にはなく、その姿に重ね合わせた Avice 一世の中に the Well-Beloved を認めているのである。今や the Well-Beloved は〈死〉という絶対的な障壁によって Pierston から隔絶されており、もはやそれ自体動き回る必要がないのである。その結果、Pierston の愛は Avice 一世に向けられて固定化する。J. Hillis Miller は次のように述べている。

The first Avice lives in the present with an intense combination of presence and absence which guarantees that Jocelyn's love will never change. It will never change, like Sergeant Troy after Fanny's death or like Hardy after his wife's death, he is separated from the object of his desire by impenetrable barrier and so can never consummate his love.⁴⁾

Pierston が愛したのは亡き Avice 一世であり、彼にとって Avice 二世は ‘the revitalized Avice’ (108), ‘the living representative of the dead’ (110) だったのである。また、この事はさらに20年後に彼が会おう Avice 三世についても当てはまる。Pierston の心をこれ程までに燃え立たせる Avice 一世とはどのような存在で、その死は何を意味しているのだろうか。

Avice 一世の死を知った時、Pierston の眼前に浮かんできたのは ‘the vivid presentation of Avice Caro, and the old, old scenes on Isle Vindilia which were inseparable from her personality’ (86), つまり亡き Avice の姿と彼女からは切り離せない昔の島の情景であった。しかし、島に帰った彼の目の前に現れたのは、昔の島の情景ではなかった。以前は半島の付け根の所まで敷設されていた鉄道が、細長い陸地を通り、今では島の内部にまで延長されていたのである。

Since the days of his youth a railway had been constructed along the pebble bank, so that, except when the rails were washed away by the tides, which was rather often, the peninsula was quickly accessible. At two o'clock in the afternoon he was rattled along by this new means of locomotion, under the familiar monotonous line of bran-coloured stones, and he soon emerged from the station, which stood as a strange exotic among the black lerrets, the ruins of the washed-

away village, and the white cubes of oolite, just come to view after burial through unreckonable geologic years. (90)

鉄道の駅は ‘a strange exotic’ と描写されているように、島の風景の中に、奇妙な外来物の如く立っている。Avice Caro とは不可分な ‘the old, old scenes on Isle Vindilia’ は失われ、かつては外部と隔絶していた島も今では、 ‘the peninsula was quickly accessible’ とあるように、外部の社会と容易に行き来できる土地になっていたのである。

Avice 一世の死は、古い伝統的な The Isle of Slingers が永久に失われたことを表すメタファーではないだろうか。Avice Caro の死と呼応するかのよう、昔ながらの島の風景は失われ、島の人々の生活も大きく変わってしまった。そして、そのような変化の象徴が島の中にまで延びた鉄道とその駅なのである。Avice 一世が生きていた時代は、島の古い伝統的な文化が鉄道や教育に象徴される近代化の波と激しくぶつかり合った時代だった。だが、それは島の伝統的な文化がまだある程度その勢力を保っていた時代だったのである。そして Avice 一世の死は、そのような時代の終焉、つまり島の伝統的な文化が近代化の波に敗れ、永遠に失われたことを意味しているのである。

7. 結語

The Well-Beloved は *Tess* と *Jude* という傑作小説の間に挟まれて、Hardy の作品としてはどこか場違いな印象を与えがちである。例えば、Peter J. Casagrande は、‘If regarded wholly as a phenomenon of the 1890s, *The Well-Beloved* is bound to remain something of an anomaly.’⁵⁾ と述べ、*The Well-Beloved* を実質的には1870年代の作品であるとしている。しかし、*The Well-Beloved* をその社会的側面に注目して読んでみると、Casagrande の見解は必ずしも正しくはなく、*Tess* と *Jude* の間を埋める興味深い作品であると言えるだろう。Hardy の小説を初期のものから順に読んでゆくと、Wessex 地方の変化の跡を辿ることができるが、*Tess* で農村地帯を揺るがせていた近代化の波が、*The Well-Beloved* ではさらに進行して、Wessex でも辺境の地である The Isle of Slingers にまで及んでいることが分かる。それは近代化の波が Wessex の隅々にまで達したことを物語ると同時に、Hardy が描き続けてきた伝統的な Wessex が、その外見はともかく、実質的にはほぼ崩壊したことを意味するのである。次作の *Jude* では、もはや伝統的

な Wessex の農村地帯は描かれず、Marygreen という変貌した農村の一部が最初に少し現れるだけで、物語の舞台は都会に移っている。Pierston が亡き Avice Caro に寄せる狂おしいばかりの想いは、古き The Isle of Slingers に寄せる想いであり、それはまた Hardy の失われた Wessex に対する想いでもある。*The Well-Beloved* は Hardy の Wessex への挽歌であると言えるだろう。

近代化に対する Hardy の想いは複雑であったに違いない。彼の多くの作品には、古き Wessex に寄せる深い愛着の情が感じられ、近代化は好ましくないものと思わせるところがある。例えば、*The Well-Beloved* でも、教育の普及が地方の独自の文化を奪い、何もかも均質化してゆくことが指摘されている。しかし他方において、Hardy が近代化がもたらす良い面を認識していたことも見落とせない。というのも、Wessex の伝統的な社会には迷信や悪習も少なからず残っていて、それらはしばしば人々を不幸に導いたからである。The Isle of Slingersに残っていた結婚にまつわる独特の風習も、過去に多くの悲劇を生んだに違いない。Hardyは人々を啓蒙することによって多くの不幸が防げると考えており、その意味で近代化が果たすであろう役割をある程度評価していたのである。

三世代にわたる Avice への恋に破れた Pierston は、the Well-Beloved の呪縛から解放されるが、同時に芸術への情熱も失う。老いを悟り、時の流れを現実的に受け止めた彼は、汚染の危険性のある古井戸を埋めて水道を引いたり、湿気の多い建物を建て直したりするようになる。⁶⁾ Pierston の新しい生き方は、Hardy が近代化をどのように受容したかを示唆しており、この点でもまた *The Well-Beloved* は興味深い作品である。

註

テキストは Thomas Hardy, *The Well-Beloved*, New Wessex Edition (London: Macmillan, 1975) を使用。頁数のみを表示してある引用文は上記テキストからのものである。

- 1) Richard Little Purdy, *Thomas Hardy: A Bibliographical Study* (London: Oxford University Press, 1954), pp.283—4.
- 2) Emily Hardy, *The Life of Thomas Hardy* (London: Macmillan, 1962), p.286.
- 3) Thomas Hardy, *Tess of the d'Urbervilles*, New Wessex Edition (London: Macmillan, 1974), p.48.
- 4) J. Hillis Miller, *Thomas Hardy: Distance and Desire* (London: Oxford University Press, 1970), p.173.
- 5) Peter J. Casagrande, *Unity in Thomas Hardy's Novels* (London: Macmillan, 1982), p.155.
- 6) この事に関連して、Richard H. Taylorは次のように述べている。

But here there is a curious and poignant sense of betrayal in that it is one of the Isle's most sensitive and visionary sons who eventually becomes the agent of unimaginative modernism: now canker is being generated from within.

Richard H. Taylor, *The Neglected Hardy: Thomas Hardy's Lesser Novels* (London: Macmillan, 1982), p.166.

ここで Taylor は Pierston、つまり島の内部の人間が近代化の推進者になるという点に、〈裏切り〉(‘betrayal’) という辛辣な意味合いがあると論じている。Taylorの指摘は興味深いものであるが、島育ちのPierstonが変化の担い手になるというのは〈アイロニカル〉であると言ったほうが良いだろう。彼について「裏切り」という言葉は必ずしもすぐわない。というのも、Pierston は島の伝統的な風俗や習慣の破壊者ではなく、むしろ改革者として島の住人たちの生活環境を改善しているからである。

Social Aspects of *The Well-Beloved* — Place, People, Time

Michiyuki OHMOMO

Abstract : Thomas Hardy's last published novel *The Well-Beloved* depicts a fantastic love story of the sculptor Jocelyn Pierston, a native of the out-of-the way peninsula called The Isle of Slingers. Pierston is infatuated with his Well-Beloved, an ideal of womanhood, and falls in love with the three Avices of the same family on the Isle— mother, daughter and granddaughter. The novel is usually interpreted to represent the idea that a man loves not the reality of a woman but the vision or image of her that exists in his own mind. However, close reading reveals that there is a social aspect about the novel which is typical of Hardy's works—the old vs. the new. Even on The Isle of Slinger, one of the most secluded places in Wessex, modernization is impinging. The railroad and education are the main agents of social change. The death of Avice Caro symbolizes the collapse of the traditional Isle, and at the same time, marks the end of old Wessex. Pierston's fervent longing for Avice the first represents his ardent desire to regain his old island which now only exists in his memory.

Key words : isle, city, railroad, education, change